

座談会

文京洙 (ムン・ギョンス)

(立命館大学国際関係学部教授)



姜尚中 (カン・サンジュン)

(東京大学大学院情報学環教授)



# 2005年 日本・朝鮮半島・アジアを展望する 在日コリアンの視点から

今年は、日本と朝鮮半島との関わりにおいて、大きな節目の年を迎えている。  
実質的な植民地支配から100年を経た今、国民国家に翻弄され、厳しい差別の中で  
生きてきた在日コリアンはこれからの未来をどう展望すべきであろうか。  
この大きなテーマについてお二方に語り合っていた。

2004年12月19日 於：東京・山之上ホテル  
聞き手 宋悟・(特活)コリアNGOセンター代表理事  
編集協力 篠藤ゆり

今年には第二次日韓協約による実質的な植民地化開始一〇〇年、解放後・戦後六〇周年、日韓条約締結四〇年、南北首脳会談五周年と、節目の年でもあります。そこで最初に総論として、「在日コリアンは今、どういう時代に生きているか」について、お話いただけますか？

文京洙 自身はどちらかというと総連の枠組みの中で育ってきた、ということもあって、今年にはなによりも総連結成五〇周年、つまり在日朝鮮人運動の「路線転換」の年ということに大きな意味を感じています。在日朝鮮人の歴史を考えると、一九五〇年代というのはけっこう重要だと考えています。というのも世界的に見ても、その頃はアジアの解放の問題が民族の解放、つまり民族独立の問題として考えられた時代であった。そういう世界的な状況の中で、朝鮮半島について言うと、朝鮮戦争があり、南北が対立したまま、南北統一が至上命題として在日朝鮮人にも朝鮮人全体にも意識されている時代だった。

また在日朝鮮人そのものも、ある意味では一番差別のひどい時期で、識字率も低く、情報も制限されている中で、共同体的に寄り添い助け合いながら暮らし、自覚したインテリたちの民族主義的な理念や啓蒙がそれなりに意味を持った時代だった。そういう主体的な条件や世界的な条件を前提に、戦後の在日朝鮮人運動の理念や方向がつけられていく。それをひとことで言うとナショナリズム、もっと言えば、一民族一国家という方向性

だったと思います。

ただ、一〇〇年ということだと考えると、今だから言えることではあるけれど、在日朝鮮人の実態が本当にその枠組みに合っていたのか、考え直さないといけないのではないかと。これはいつも言っていることですが、戦前の在日朝鮮人の生活実態を考えると、いわゆる強制連行で来た人は戦後ほとんど帰国していった。戦後の在日朝鮮人を形成した基盤は、すでに三〇年代に定住していた人たちによって作られていた。日本に渡って定住するに至った経緯は、実際は植民地時代のいわば構造的な強制であったわけですが、来る契機はともか

### 在日朝鮮人の実態は本当に一民族一国家の枠組みにあったのか(文)

くとして一応、日本社会に定住しながら、本国と境界を越えた生活圏をつくっていた。

そのことを考えると、五〇年代に確立するよう一民族一国家という枠組みで、本当に在日朝鮮人は律しきれぬような存在だったのかどうか。逆に、本来国家だとか国民とかといった枠組みではなかなか律しきれぬ存在であった在日朝鮮人が、国家という枠組みに囲い込まれ、あるいは分断され、取り込まれていく過程が五〇年代だったと思う。その状況が、五〇年代、六〇年代、七〇年代と続き、八〇年代後半以降は世界的な条件

日本の国際化やグローバルゼーションを前提に、国民国家の揺らぎという時代がやってき

た。今、その国民国家の揺らぎを前提に、在日朝鮮人の国や民族としては割り切れない、というそのあり方があらためてクローズアップされると考えている。

姜さんもそうだと思うけれど、八〇年代頃から新しい次元で在日の問題が再検討されてきたが、議論の主眼は、五〇年代に確立した一民族一国家を前提とした民族主義を相対化し、批判するということだった。ただ最近の日本社会を見ると、かつてのような「同化」という言葉は使われないもの、在日朝鮮人を日本という枠組みの中に囲い込もうという動きがあらためて強まっている。日本

国籍取得運動とでもいえばいいのか、二〇〇〇年に「第一次出入国管理基本計画」というものが発表され、それを前提に坂中英徳さんあたりがいろいろな発言をして、これに呼応するような動きも在日のなかに現れている。八〇年代には在日朝鮮人を本国に向けて囲い込んでいくこととするようなナショナルリズムの理念を相対化したり批判したりしてきたが、ところが最近では逆に、国際化やグローバルゼーションに対応する「多文化主義」の装いのもとに、日本という枠組みに囲い込まれようという動きがとて強く出ていて、それに対して在日としてどう対処していくのか。あるいは、コリアNGOセンターなどがどう対処していかなくて

はいけないかを、考えなくてはいけない時期にあるような気がしてる。

姜尚中 在日を今振り返ると、人間性回復のドラマがたくさんあったということも、多くの人々が共有し合えるようになった。ただ、「全体としてのコリア」はまだ回復されていない。これは本国もそうだし、在日もそうだし。

戦前と前後と大きく違うのは、三〇年代以降から日本だけではなく朝鮮半島周辺に多くの人々が散在してしまっただけで、やっとなんか空間的な広がりを持って見られるようになったのではないかと。先ほど文さんが一民族一国家について言及したが、在日の中にも南北があり、日本の閉ざされた中で対立図式があった。今はおそらく多くの人々が在日という存在を、もう少し広い空間の中にある自分たちと認識し始めたのではないかと。これはかなり大きな違いであると思う。その場合、「全体としてのコリア」を、何によって回復できるのか。それにはやはり、分断の克服が必要となってくる。五〇年に朝鮮戦争が起き、五三年に境界線が固定化されたが、さまざまな自分たちの夢や希望をどう叶えるかを考えるとき、いろいろなイデオロギーではダメであった。ダメだったということは、好むと好まざるにかかわらず、ある種の神話から解放されたということもある。苦渋を伴いながら、でも逆に、人間性の回復という点について間違いなく多くのドラマがあったし、それはこの地に生きてきた人々にとっ



姜尚中(カン・サンジュン) 1950年生まれ。著書に「東北アジア共同の家をめざして」(平凡社)「在日」(講談社)「デモクラシーの冒険」(共著/集英社新書)など多数。

てひとつの共有財産でもあり、それをみんながどこかで誇りに思える面も出てきた。

ただ依然として、「全体としてのコリア」は回復されていない。でも僕は、最後の八合目まで来ていると思っている。「終わりの始まり」が始まった。と。半世紀にわたる分断の終わりの始まりが、ようやく始まった。これまで分断によって、在日のさまざまな感性が内部的相克のために消費されてゆき、自分たちの持っているポテンシャルを世界に向かって開くことができなかつた。それは言い換えると、自己実現がずっと阻まれてきた、ということだ。全体としての朝鮮が回復されていないがゆえに、北であれ南であれ、ある大きな分断構造のしがらみの中で、我々は好むと好まざるとにかかわらず翻弄されてきた。しかし今、最後の全体性の回復が八合目まで来て、残りの二合が見えてきた。それを越えるときが、一〇〇年かかってようやくやってきたのではないか。

確かに今、政治的には危機的状況にあるけれど、しかしこれは解放以来半世紀に渡って有形無形に天蓋のように我々を塞いでいたものが、壊れ

ていく過程でもある。壊れていくからこそ、危機的だといえる。それに参与し、壊して「全体としてのコリア」を回復できるという感性を、一方で初めて持てるようになった。一九〇五年の第二次日韓保護協約以来、朝鮮半島はこの地域で自分の運命を決定できるアクターであったことが一度もなかった。今、六者協議について言われているが、ここでは間違いなく分断はされているけれど、確実にアクターとして入っている。これはやはりそれまでとは違うわけで、だから今、徐々に全体性の回復に向かいつつある。

ただ多くの人にとって、その全体性の回復があまりにも遅かった。そのため在日の中でも、自分

## 最後の全体性の回復が八合目まで来て、残りが見えてきた(姜)

の痕跡を消して、日本人に紛れ込んでいく人もいる。しかし一面においては、在日が内部的に多様化したとも言える。国籍の点においても、アイデンティティーにおいても、それもひっくりくるめて僕は、全体性の回復の意味があるし、「終わりの始まり」が来ていると考えている。言い換えると、やっとな政治的なるものから解放される時代がきた。私たちがこれまでポテンシャルを描きえなかったのは、あまりにも政治的なものに絡み取られ、いやおうなしにその制約を受けてきたから、すべての思考がなんらかの形で政治的にならざるをえなかったからでもある。しかし考えてみる

と、普通の生活というのは、そんなに政治的なことを考えなくても生きていけるし、等身大に自分の生活を考えれば、さほど政治というのは人々にとってリアリティーのあるものではない。そうした等身大の域に、徐々に行きつつある。行きつつあるがゆえに、過剰に政治的なものをもう一回は潜り抜けないと、向こう側に行けない。そういう状況ではないだろうか。

確かに在日コリアンとしてもう一度国家と個人の関係を再定立すべき時期に来ているのではないかと思います。

文 これまでいろいろな形で在日の自由な選択肢

が制限され、制約されてきた。その最大の要因はいつまでもなく日本社会の差別だと思っけれど、これに反対する運動の理念や取り組みのなかにも、ある意味では本当に生活から根ざした自由な選択を阻んできた面がすくなくない。それを姜さんは政治という言葉で表現されたけれど、そこから今、ようやく解き放されつつある感じがしている。国家との関係で言うと、国家との関係からはずれているのが在日なのに、それを国家との関係に組み込もう、組み込もうとする圧力が、いわば左からも右からも加えられてきた。日本社会の問題で言うと、八〇年代以降「国際化」がすすみ、



ムンギョンス  
1950生まれ。法政大学社会科学  
科学研究課修士課程終了。  
著書に「現代韓国への視点」  
(共著・大月書店)、訳書に  
「済州島・四三蜂起」(新潮  
社)などがある。

九〇年代半ば頃は、日本の国会で不戦決議があつたり、村山発言があつたり、ある意味では日本社会の「国民」の揺らぎの意識や加害者認識の国民的共有が頂点に達した時期だったとも言える。しかし、その反動が来ている。もう一回政治的なことを潜り抜けてはいけないというのは、そういう意味もあると思う。というのも、在日に對して抑圧的な反動の動きが強まると、こちら側もまた反動の動きというか、原理主義というか、そういう動きが強まってくる。八合目という表現は、まさにその通りだと思っけれど、改めている

## 我々は、国家や国民という枠には律しきれない(文)

いろいろな我々の自由な可能性を制約する動きが左から右からも出ていて、それに対してこちら側から声をあげていかななくてはいけない。あげていくときのポイントが、我々は、国家や国民という枠には律しきれない、ということだと思っ。日本国籍の取得に関しても、一人ひとりの選択としては自由であるし、私自身もそういう主張をしてきたけれども、在日は全体としてそうすべきだとか、

あるいは逆に全体として本国を志向すべきだといったような論理は、在日の歴史的な経緯から言っても今のあり方からいっても違うんだということも、もっというと国民や国籍による切り分けそのものを拒否していくことが重要ではないかと思っ。

**八合目まで来たところで、あと二合を越えるためにもう一度政治的な回路を清らなくてはならないというのは、どうイメージしたらいいのでしょうか。**

姜 やはりそれは、統一ということだろう。統一と言っても、僕はまだ先の話だと思っが、とにかく今、歴史的につくられ、戦争によって固定化された分断というものを、もう一度反転させなくてはいけない。つまり和解ということだが、そのためには膨大なエネルギーを必要とする。

それに歴史的記憶もある。和解が始まるということ、日本とも新しい関係を作り出さなければいけない状況が起きるといっことだ。それは日本にとっても、ある意味で歴史的かつ政治的課題を突きつけられることになる。

つまりこの地域全体における半世紀にわたる大きな構造的要因が今、解体しつつあって、この地域に住んでいる人たちは好むと好まざるとにかか

わらず、その影響を受けざるをえない。その一方で、人間性の回復と先ほど言ったが、これは文化的な回復と言ってもいいと思っ。文化的な交流が、空間的に非常に多様に広がっている。その軌みがある。言ってみれば政治と、社会、歴史と、もう一方では経済や文化がある意味で非対称的な状態にあつて、ギャップからくる軋みがある。もっ自分かりやすく言っ、それこそ金正日と裴ヨンジュンに表現されている(笑)。

つまり、かなりいろいろな分断と断層が走つていて、そういうさまざまな断層が走る中、大きな流れとしてはこの地域に生きている人々を巻き込む形で変化が起きている。その変化のひとつが、それぞれの地域社会で屈折して違つた形で現れているわけで、たとえば中国沿海州の朝鮮族の場合どうなのか。日本にいる在日はどうなのか。それぞれ地域の屈折があつて、背景も違っわけだが、しかしこの地域を巻き込んだ世界的変化が、今「終わりの始まり」として始まるうとしていてのではないか。

そういうことが政治的トピックとして浮上してくるわけだが、その下にある裾野としては、僕たちが空間的にかなり広がりを持てるようになってきた。それと同時に、在日の内部的な多様性も開かれつつある。そういうふうな外的変化と内側の変化が絡み合いながら、在日の人間性の回復がなされつつ、全体の回復にどうやって向かつていくか。個人的なことを言っ、僕の場合あと一〇年





今、同じように来たいて、これはかなり人々にとつては難しい状況をもちたす。けれども全体的なパイはまだ大きいから、引か

の資産は確実に目減りしていくので、格差が広がっていくことは間違いない。

昨年出版された「希望格差社会」(山田昌弘・著)によると、希望が持てない人と持てる人の格差がどんどん広がっているという。一方在日にも目を向けると、日本人以上に豊かな人が在日にもいるし、資産・所得において、階層ということでは在日を定義できない。そういうすごく複雑な関係がある。韓国もまた、格差が日本以上に広がっ

### 韓国は経済が発展して日本に近づき、

### 日本は違う面で韓国に近づくと(姜)

ていると思う。特に韓国は九七年のIMF危機に際してグローバルスタンダードを導入したが、これは劇的な面もあって格差も広がった。日本も

かっけいられる。

そういう面でも日本は韓国に近づいている。つまり韓国はより経済が発展して日本のレベルに近づき、日本は違う面で韓国に近づいていく。ということとは、半世紀にわたってこの社会をつくつてきた生活感覚が、相当変わらざるをえない。変わらざるを得ないということを理解しながら、変わりにたくないという葛藤が今の社会にはある。これは間違いなくある社会が変わろうとするときの未

期的症状で、そういう状況下では政治的にラディカルに右側の人が発言する場合があります。つまり社会的にかなり抑圧があるので、下に向かつてさまざまなプレッシャーを転移させたいという動きが出てくる。それがいろいろな面で現れていて、今我々はそういう社会に生きていると言える。

確かに、「日本の状況がこうだから、こういう方向をとろう」とみたいなことは、言えなくなってきた。たとえば日本でも韓国でも労働人口の構成が変わってきて、製造業に携わる人々の層が相当に薄くなっている。かつては製造業部門が厚いということ前提に社会が成り立っていたわけだ、福祉国家という理念も、マルクス主義に基づく階級闘争も、そこを前提としていた。ところが今や、そういう理念でもって、「世界が

こうだから」という大きな神話が、もはや成立しなくなっている。そういう、よって立つ理念やイデオロギーの終焉という状況の中で何が必要かといえ、月並みかもしれないけれど、結局、いかに自由で開かれた議論の場を確保していくかということが、非常に大事になってくる。だからコリアNGOセンターの存在も、すごく大きな意味があると思う。

そういう議論の場を確保する上で忘れてはいけないのは、難民条約の批准以後の八〇年代、内外人平等の原則で在日の法的地位もそれなりに改善されたが、老齢の一世をはじめとして在日の一部の人の状況はものすごく悲惨だ、という事実だ。無年金問題に象徴されるように、在日の法的地位が上がって制度的差別がなくなったとはいえず、在日の中でも最も社会的に困難な人たちへの制度上の差別がいまだに残っている。そういう人たちの思いや意見も含めて、自由に自分たちの意見を言えるような議論の場を、どう確保していくのか。これはけっこう難しいことではあるけれど、日本という空間だけではなく本國という空間も含めていろいろな形で議論の場を確保し、議論の中から出てくる方向性を尊重し実現していけるような仕組みをつくっていかなくてはならない。

姜 人間が生きている限り背負わなくてはならない病気とか、老い、家族の問題、死生観といったものは、あくまで個人的問題ではあるけれど、し



かし一方で差別がそうした問題をより困難にできたのは確かです。先ほど人権性の回復と言いましたが、差別によって生まれる人間性

の問題や歪みといったものは依然として高齢者の間に存在していて、そういうところにもう少し目を向けるべきではないか。そういう問題を今まで我々はなかなか自分たちのテーマ性として設定できなかった。今、韓国社会はそういうものを作り捉えられるようになったからこそ、たとえば映画などでバラエティに富んだテーマの作品が生まれるようになった。つまり人間性がそれだけ豊かになってきているということだ。在日でも今後、老いの問題、親子の問題などを、日本人とは違った位相で、しかし同時に普遍的な問題として受け止めなくてはいけないと思う。

**今後、在日コリアンのビジョンを考えたとき、東アジア共同体ということも視野に入れざるをえない。最近では日本社会の中でも徐々に東アジア共同体への関心が深まりつつあります。改めてなぜ東アジア共同体なのか。その必要性をどう考え、そこにおける在日の役割とは何なのか。また、東アジア共同体が形成されていくとしたら、その過程でどういう変化を在日社会にもたらしていくのか。そのあたりは、どうお考えですか？**

文 東アジアという地域は、国民国家とか、冷戦とか縦にも横にも分断と亀裂の中に置かれてきたわけで、そういう分断と対立がこの地域が本来持っていた政治、経済、文化などさまざまなレベルでの潜在力を封じ込めてきた。東アジア共同体というのはおそらく、理念とか利害によって分断され、囲い込まれ、切り離されていたものを、もう一度風通しのいい地域にして、可能性をもう一回開いていこうという動きではないかと思う。冷戦終焉の頃から、日本でも「環日本海」の地域協力が注目され始めて、新潟を中心に日本海沿岸の諸県でも、新しい発展の可能性をそこに見出そう

**分断され、囲い込まれ、切り離されていたものを、**

**もう一度風通しのいい地域に(文)**

としてきた。しかし、それがこの一〇数年ほとんど掛け声だけに終わってきたが、その最大のネックになっているのが、なんとと言っても日本と北朝鮮の関係で、そこが突破できれば相当この東アジア共同体は現実味のあるものとなり、弾みもつくだろうし、在日に与えるインパクトも大きいのではないかと思う。

アメリカの一極支配とアメリカへの依存から出てきているもので、これは早晩、現実の限界に達するだろう。将来的にはドルが暴落しかねないくらい価値が落ちていくだろうし、アメリカの経済力はEUと比べて信用が落ちつつあって、アジア全体がドル離れを少しずつ起こし始めている。なるほど軍事的にはアメリカは超大国だけど、経済は多極化に向かいつつある。多極化に向かう流れに対して、それを引き戻したいという動きがアメリカにはあるわけで、日本は多極化の流れに乗るのか、一極化の下支えをするのか、混沌としてまだ見えない。そういう中でASEANと北東ア

姜 この地域ではまだ冷戦が終わっておらず、同時に多極化に向かっている、しかしそれは三〇年代的なブロック化とは違うものだ。今の日本の政治的な動きは日本一国で出てきたものではなく、

シアは間違いなく世界の経済的な中心のひとつになりつつある。もちろんそれはアメリカの大きな経済力との関係抜きにしては考えられないが、日本一国を考えたもこの地域に対する貿易額は対米貿易額を上回っている。だからある一定の域内で、実態的な貿易投資関係が、かなり確実に育っている。つまり徐々に経済的な相互依存関係が、トランスナショナルな方向へと向かう時期に来ている。

そのときに、北東アジアというのは、日本にとって非常に難しい地域でもある。国という観点



排除して、民族自決のもとに我々が我々の運命を決めるんだ」という形で今まで言ってきたのが、南北の分断ナシヨナリズムである。

さしあたって韓国は、多国間主義によってそれを乗り越える方向を打ち出しているが、これは暴論かもしれないが、僕は、北朝鮮という国を再建しなくてはいけないと思っている。再建をして、ゆくゆくは国家連合にして、ゆるやかな連邦制へともっていく。そうすることは在日にとってどん

な意味があるかというところ、自分たちが活動し、生きられる場が増え、人生の選択肢が広がると思う。

因を孕んでいるとも言える。  
ヨーロッパの場合は、全欧安全保障会議があった。東と西のブロックの和平を進めてゆき、その中で東西両ドイツの統一ができた。その意味は、ナシヨナリズムは国際化を経なければその克服ができないということを我々に示しているということだ。つまり、国と国が、「すべての外部勢力を

が、しかし可能性が提示されることで、東アジアのさまざまな民族的マイノリティーが、かなりいるような動きをしてくるのではないか。そういう観点で在日も捉えるべきだし、だからこそ僕は、八合目まで来たと言っているわけだ。在日の可能性が、かなり開かれてきている。その中の危機というものを、どう乗り越えるか。

文 姜さんが東アジアの流れが在日の選択肢を広げるだろうと言ったが、それが一番、大事なのではないか。選択肢を狭めていた制度と意識をいかに変えていくかということが重要だと思いが、そのことを踏まえて民族教育を考えていくと、そもそも民族とは何か、という点を問い直してみる必要がある。

## 国を超えた結びつきを深めることで、 自分たちの統一に向けた動きが加速される(姜)

から見たとき、過去の歴史的な経緯もあるし、一〇〇年間、自律的な国としての要因がなかったわけだから。ただ昨年十一月、ラオスでのASEAN首脳会議で東アジア共同体構想が提示されたが、僕がやや心配しているのは、実は東アジア共同体といっても日中によるASEANに向けた覇権的なブロック化の競合関係が水面下にあって、その中で今、東アジアということが出てきている。それが長期的にどういう方向に向かうのかが、まだ見えていない。そういう点では、この地域はヨーロッパと違って、不測の事態が起きる要

とところが今は、ある地域的な、国を超えた結びつきを深めることによって、自分たちの統一に向けた動きが加速される。そういう段階に来ているのだと思う。  
一方においてそういう現象が、マイノリティーにもすごく可能性を提起している。国民国家の時代であれば、マイノリティーは国民国家の中で封じ込められているが、今はマイノリティーが活躍できるスペースがいたるところに広がっています。それは下手をすればエスニック・ナシヨナリズム、分裂的なナシヨナリズムになりかねない

在日の役割ということ言えば、コリアNGOセンターのひとつの大きな事業として、大阪で民族学級の制度保障の事業を行っています。今、大阪市内の小中学校九八校、大阪府内で一六〇校、約二八〇〇人の子ともたちが民族学級で学んでいます。実際に民族学級の現場に行きますと、アイデンティティーもエスニシティも多様化しており、在日密集地域以外の地域では日本国籍の在日の子ともたちのほうが圧倒的に多い。若い世代の教育についてご意見を。



いし、ある意味では一人一人の選択の問題でもある。だから親が、多少なりとも子どもを民族的に育てたい、あるいは多少なりともウルマルができるような子に育てたいと思ったときに、そういう選択が自由にできるような環境や仕組みが必要なので、そういうものとして民族教育を考え直していかなくてはならない。もっと言うと、在日といえども朝鮮人であるから朝鮮人らしくあらねばならない、という理念から民族教育を立ち上げるのではなくて、一人ひとりの在日の親たちが、いわばしつけや子育ての上での選択の問題として、多少なりともわが子を朝鮮人らしく育てたい、という思いが先ずあって、その上でその思いをよりどころに民族教育を作り直していかなくてはなら

もしれない。しかし、基本的には、今では民族というのは、一人ひとりの個性の問題に還元して考える必要があるであって、いろいろな濃淡があってもいい

ない。そのことを具体的に現場の中でどう具体化し、政策として練りあげていくかはよく分からないけれど、民族という考え方そのものを変えていかなければいけない局面にいまはあるかもしれない。

姜 民族教育というからには、歴史について国籍の違いを超えて教えていくべきだし、在日としての民族的自覚を持ち、我々が民族的と考えている最低限の何かを教えるということとは必要だろう。ただ、チマ・チヨゴリを着ているから民族的かど

## 民族的というものは、一人ひとりの

### 個性の問題に還元して考えることが必要(文)

うかというところ、最近韓流ブームで日本人がけっこうチマ・チヨゴリを着たりもしているから(笑)。

そうすると、いったい何が大事かを考えると、結局は名前なのではないか。日本国籍を持っている

ても、通名として民族名を語る人がいてもいいし、さしあたりそういう社会でなければ、日本国籍を持つことの意味もないと僕個人は思っている。民族に由来する名前を持っていれば、おのずからある年齢に達すると、朝鮮半島にゆかりのある人間として、いろいろなことを考えるようになると思う。ところがそこがないと、まるでモグラのような見えないマイノリティーになっ

て、自分の名前をかけたがえのないものとして受け取っていいから、そういう世代を我々が持てれば、国籍いかんにかかわらず、必ずなんらかの問題を受け止めていけるはず。ここまでの韓流ブームが起こり、しかもそれが必ずしも一過性のものではなさそうだし、そうなるなら今までの民族的なものが目に触れなかったけれど、むしろありふれてきて、それがコマーシャルイズムに乗って商品化されている。それに我々は一時期戸惑ったり、当惑したり、一方で北朝鮮に対するあれだけひどい報道があり、まったくさっぱり了解不可能な状態

に陥っているわけだが、そういう中で民族の文化に触れましょうという場合、最後は名前なのではないか。金でも朴でも李でも、受け継いだ名前を名乗ってこの社会で生きていく。それが一番、大切なことではないかと思う。

**最後に、コリアNGOセンターに期待、注文することは何か、お聞かせください。**

文 コリアNGOセンターができたことは、ちょっと大げさかもしれないけれど、五年の「路線転換」くらいの大きな意味があると思っています。期待することは二点あって、ひとつは何よりも在日が自立する、ということだ。もちろ

ん、自立するといつても本国との関係を切れということではない。本国や、より広く東アジア共同体とのなかで、さまざまな境遇で生きる人たちの接点やネットワークをつくって行くことは重要だけれども、先ず私たちが自立的に議論したり、方向を決めたり、取り組んだりするという枠組をきちつと作ることが大切だと思う。この自立という問題一つとっても、これまでの総連の運動や民団の運動を考えると、まさに「路線転換」と言ってもいいのではないか、と思う。

もうひとつは、二重の意味で公共性を担ってい

## 仲良しグループにならないことを肝に銘じてほしい(姜)

けるような存在になってほしい気がする。在日の共通利害や地位の改善にかかわることだけではなく、私たちが生きている地域社会全体の公共性に関してもいろいろな形でコミットしていくし、議論に加わっていくということだ。在日朝鮮人が九〇年代に入って地方参政権の問題を提起したというのも、在日が地域社会の住民としてそのあり方やつくりかえに一定の責任を負うという自覚の表明でもあるし、在日の権益擁護運動がそういう段階にあることを象徴しているとも思える。

公共性のもう一つの意味は、くり返し同じことを言うようだが、自由な議論の場ということではなく議論を丁寧にし、そして開かれた透明なものにしていただきたい。先ほども言ったように、

本来あまりそういう公共的な議論で掘り上げることのできなかつた問題をどう議論の中に取り組んでいくかということを含めて、本当に開かれた自由な議論をこのコリアNGOセンターと言つて枠組み、取り組みの中で、どう作っていくか。方向性が見えない時代だからこそ、そのことが何より大事だと思う。

姜 ただ、外野席から言えば、仲良しグループにはならないということを肝に銘じてほしい。そのためには、在日といつてもローカリティがあることを忘れないでもらいたい。言うまでもなく在

日は、人口分布的には一番関西に集中しているわけだが、目に見えないかなりローカルなところで、自分の名前すら名乗れない人たちがいることを忘れてはいけない。それに関西なら関西というある特定の地域のローカル性に根ざした活動になつてしまうと、文さんがおっしゃつた今まで掘り上げられなかつた問題というのがなかなか拾い上げられない。だから地域社会の中でボツン、ボツンと孤島にいるような人たちにとって敷居が高くない枠組みとして浸透していかないと、在日のNGOとは言えないのではないかと思う。

内部的に仲良しグループにならず、党派的にもならないためには、耐えず違う要因をどしどし貪欲に入れていったらいいのではないか。そのため

にも地域性という問題を考えてほしいし、それができれば名実ともに、日本列島すべての朝鮮半島にゆかりのある人々にとって大きな支えになると思う。在日といつても、日本国籍、ダブルなどいろいろあるだろうけれど、それらを網羅的にきちつと受け止められるようなものに成長していけば、おのずから南北の統一やコリアン・ネットワークまで広がっていくのではないかと思うし、ぜひそうなるしてほしいというのが僕の希望です。

今日はどうも、ありがとうございました。